

財団だより

多摩川

1989. 6 第42号



コアオハナムグリ(コガナムシ科)
体色は緑色、花粉を食べる。



多摩川での伝統漁法実演 (日野橋下)

■ 多摩川風物誌 ■

(13) 夏の風物・伝統漁法実演会

明治から昭和の初期にかけて、多摩川に大勢の行楽客が訪れるようになり、人びとは清冽な流れに鮎料理を楽しんだ。こうした行楽客の前で「鵜飼」をはじめ、「跳網」や「投網」、「寄せ網」などの漁法を職漁者が実演して見せる観光漁業が、多摩川中流域を中心に盛んに行われた。川岸には川魚料理屋が立ち並び、川漁師たちは様々な漁法で魚を捕らえ料亭に供給していた。多摩川の川べり一帯は俄に華やいだが、流れは相変わらず豊かな魚族を育み、そこに漁りする人たちは様々な漁法で魚を捕っていた。多摩川の流れには職漁者や生計の一部を漁撈による半漁民たち、それに流域住民の老いも若きもが生業もしくは遊びのために、川漁を行っていたのである。

川漁の長い歴史の過程で生まれ、発達してきた多摩川の伝統漁法は100余を数えるが、これらは魚の捕採技法の種別によって、5つの漁法に分けられる。「筥漁法」および「網漁法」、「釣漁法」、「刺突漁法」それに「雑漁法」があるが、いずれも魚の習性を良く見極め、

逆にそれを利用した創意にあふれる技法が多い。さらに、複雑に変化する川の状態と水の流れに応じた巧みな漁法もあり、一つ一つが甚だ変化に富んでいる。また、それぞれの漁法に使用される漁具も数多いが、簡素な中に優れた捕採機能を具えたものが少なくない。

多摩川水系で、昔から行われてきた伝統漁法の名称には、それぞれの漁法に用いられる特定の捕採漁具の名称に代表されたものが多い。例えば、「雑魚笥」や「寄せ網」など、漁具名が、即漁法を表す例は枚挙にいとまがない。こうした漁法の呼称については、漁という人と魚における直截な関わり合いの中で、漁法の名称には、最も密接的な使用漁具名を冠するだけで、事足りた訳なのであろう。長年に亘って行われ続けてきた漁具名を付しただけの漁法名が多い事は、多摩川のみならず、こうした事例は他の水系にも見られる。

(※今年の伝統漁法実演会は浅川平山橋付近で8月6日の予定です。)

「多摩川水系における川漁の技法と習俗」

1983年 安齋忠雄

財)とうきゅう環境浄化財団(学術)研究助成No 63より部分掲載

多摩川散歩

東京都教育庁文化課 宮崎 博

東京の西郊にあって、かつてはそこかしこに長閑な田園風景がみられた野川流域も、市街地化の波にさらされて久しい。けれども、野川左岸を野川と併走する国分寺崖線沿いには、まだまだ緑が残っている箇所や湧水池も認められ、往時の武蔵野の姿を偲ばせてくれるとともに、そこに生活した先人達に思いを誘うまでもくれる。そんな地域の一つでもある入間川・野川左岸の下流域をひねもす歩いてみました。

実篤公園（京王線仙川駅下車、南西に約0.7km）
こよなく自然を愛した武者小路実篤の邸宅をそのまま公開しており、湧水池と遺品を取めた記念館を見学できます。

城山遺跡（中央電気通信学園内）
入間川と野川の合流点を見下す地点にあり、古墳時代の大集落跡が発見されています。

上神明遺跡（みつ池・神明の森特別保護区）
旧石器時代から古墳時代に至る集落跡と、崖線には横穴墓（6～7世紀）があり、自然環境を一体にした保護が計られています。

喜多見不動尊（周辺は縄文時代遺跡）
冬至の日、南瓜に「真田幸村」と自分の名を記し、護摩供養をすれば疾病も平癒するとの伝えがあります。

砧中学校古墳群（周辺は下神明遺跡と一連の遺跡）
全長76mの前方後方墳を筆頭に、径20m余の円墳が7基存在した。前方後方墳からは、銅鏡や多量の石製装身具が出土しています。

殿山古墳群（周辺は弥生時代の集落跡）
野川と仙川に挟まれた台地上に、7世紀代に築かれた6基の円墳が点在しています。

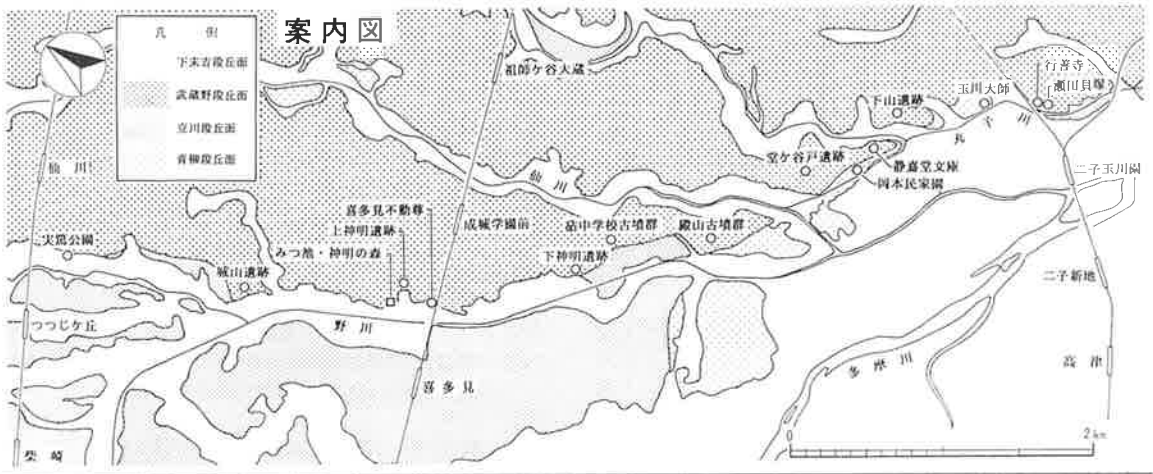
堂ヶ谷戸遺跡・静嘉堂文庫（庭園は平日開園）
環濠に囲まれた弥生・古墳時代の大集落跡。台地先端の静嘉堂文庫は旧岩崎邸で、年に4回保管の文化財を公開しています。

岡本民家園（入園料は無料）
江戸時代の旧家を移築し、当時の年中行事も再現しています。

下山遺跡（旧石器時代から平安時代の集落跡）
途中、慈眼寺と玉川神社に立ち寄れます。
玉川大師（本堂の地下には霊場もあります）
崖線下の疎水（丸子川）の散策も良い。
行善寺・瀬田貝塚（二子玉川駅まで0.6km）

行善寺は400余年の歴史をもち、境内からの眺望は玉川八景の一つにも数えられました。近くに位置する瀬田貝塚は、約5,000年前に営まれた多摩川最奥部の貝塚（ハマグリを主とする）として著名です。

緑が美しいこの季節、自然と文化財に触れながらの散歩いかがなものでしょう。



私と多摩川



「八高線のSL・1972年10月 筆者撮」

日本生活文化史学会員 香川 節

どんな山岳地方であろうと、海岸地方であろうと、砂漠であろうと、人間は川の流れから離れて住むことはむずかしい。集落は川に沿ってつくられてきた。洛陽も南京もパリもローマも、そしてわたしたちの街も。

多摩川が育てた集落は武蔵国府のあった府中を初め、調布、狛江、立川（柴崎）、青梅などのほか、支流の溪口集落として五日市、八王子がありまた河口の六郷、川崎が挙げられよう。

幼時から多摩川を望み、その水を飲み、その流域で学び、働いてきたわたしたちにとって、多摩川は「母なる川」といえよう。思い出は限りなく脳の奥から湧いてくる。

立川がまだ小さな町の一つであった昭和4年春に父は大塚窪町から移転し、多摩川に近い府中二中の南を住みかとした。幼いわたしたちは家の前の小径を多摩川へと歩いて毎日のように遊んだ。

武蔵野台地の南縁を飾るケヤキの大樹を後にして、水田の間の古甲州街道を下りてゆくと、根川の橋を渡る。桜の並木が堤に植えられ、水は汚かったが小魚が獲れた。さらに行くと、砂利道の河原に出る。芦の茂みからたくさんのヘビが足音に驚いてか、一斉に飛ぶように逃げて去る。

砂利を運ぶ馬車の轍の水溜まりをよけながら、流れに至ると、ハンカチを広げてメダカやエビが

おもしろいようにすくい取れた。こどもたちは皆靴を脱いで流れに入り、石を動かしたり、上空に舞う陸軍の飛行機を仰いだり、鉄橋を渡る汽車や電車に手を振るのであった。

東京市内から来遊するお客さんは、こうしてわたしたちの多摩川を喜び、羨むのであった。ことに夕日の沈むころ、富士・丹沢・大山、そして奥多摩や秩父の山嶺のシルエットに絶賛の声を挙げるのであった。やがてわが家の畳の上で母が供するスキヤキをつつき、終わると再訪を約して帰って行くのが常であった。

中学校に入ったわたしは、相変わらず多摩川を遊び場とした。理科の先生は多摩川で獲ったプラナリアを実験材料として「再生」を教えてくれた。そのふしぎな小さい生物は体を切断しても二匹となって生きるという。

教練も学校の運動場は狭いから、ハリキリボーイの少尉の引率で多摩川まで駆け足で行き、河原で演習をした。

蒸気機関車というものが消え失せるというので多勢のカメラマンが八高線の鉄橋付近に群れて待ち構えた中に、わたしと息子もいた。その鉄橋の下には太古のクジラの骨が発見されたという古い地層が露出している。多摩川の沿岸は地質学上でも好材料が多い。上流は石灰岩が豊富で、多くの鐘乳洞もあり、青梅線、五日市線、南武線はいずれもセメントの原料となる石灰石の輸送のためにつくられた鉄道だったことを、今の乗客は知っているだろうか。

多摩川はこの数十年のうちに大きく変貌した。もはや羽村以下は清流とはいえない。泡立つ流れにゴミが浮き沈みし、釣人の捨てたテグス糸に鳥が命を落とす。コンクリートで装われた岸、油やプラスチックがそこそこに捨てられ、心が痛む。

わたしたちの「心のふるさと」多摩川がいつの日か、かつての「無言の教訓」をとりもどすよう祈ってやまない。

よみがえ

甦れ！多摩川



多摩川紀行

山 道 省 三

① 羽田～丸子橋

ふとしたきっかけで多摩川をカヌーで遡ることになった。遡るというのは事情があって、多摩川の丸子橋（大田区田園調布）から下流は、東京湾からの潮が遡る区域であるため、ツーリング用のカヌーだと潮の動きや風向きによって下るのが難しいからだ。この5月3日は大潮にあたり、午後満潮にあたるということから、その潮の動きと海からの風に乗って遡ってみようということになった。このカヌー一行は、よこはまかわを考える会のカヌーイスト2名と私の3名によるもので、身近かな川を下ろうという企画の一環でもある。

多摩川でのカヌーは二度目である。最初は、一昨年の秋に奥多摩の沢井から日向和田の神代橋までの約5kmを下った。それまで、橋や道路上から見ることでできる所しか知らなかった私にとって、急流を下りながらみる狭谷や溪流は何とも言えないすばらしい景観であった。それ以降何度かチャンスはあったものの、とうとう今回まで多摩川はおあずけになっていた。

京浜急行の羽田空港駅まで電車でカヌーを運び、すぐ目の前の海老取川畔でカヌーを組み立てる。約30分。海老取川から多摩川本川まで10分。午前11時羽田空港のわきから上流へ向けて潮と風にまかせて出発する。

干潮時の多摩川河口は、広い干潟が露呈する。水面から見ると干潟の上にアシ原が見え、その奥に堤防、そして工場や住宅が見える。それにして

も河幅の広さと自然の豊かさには驚かされる。自然の豊かさの点でいえば、今回、上陸はしなかったが、干潟は小魚やカニ、水鳥にとって貴重な生息地であり繁殖の場でもある。この干潟は約4km上流の六郷橋下まで続いていて、水面や堤防上からは見えないアシ原の中には、小さな水路や水溜りがあり、淡水魚の専門家である君塚芳輝氏によれば、多摩川本川以上の魚類相が確認されているようだ。

また、大師河原や六郷には古い水門があり、その構造や装飾レリーフに多摩川の歴史の痕跡が見られる。JR六郷鉄橋の川崎側にはレンガ造りの護岸も残っていた。

六郷橋から上流は川幅がせまくなる。それとともに釣り人が増えてくる。また、川原は低水護岸が整備され、一皮の草地を残して公園やグラウンドとなる。水面から見るとこの低水護岸は人を水際に極めて近づきにくくしている。その大きな理由は護岸の傾斜が急なことと、万一落ちたらつかまるものが何もないことのように思える。それに洲がつかないので景観的にも変化に乏しい。

六郷橋から多摩川大橋、ガス橋と上流に遡るにつれ、カヌーやボート遊びの人が多くなる。このあたりから丸子橋間は、水質の回復とともに水上レクリエーションのメッカになりつつある。

丸子橋から河口にかけての水質は、昭和47年頃から急激な改善を見せ、BODの値だけでみると奥多摩の清流に近い値を示している。下水道整備の効果だろうと言われているが、川を遡っていて汚れた印象はほとんどなかった。むしろ、カヌーとともにボラの大群が遡上するのを見て、水質の回復とともに自然と人が確実に戻ってきている実感を得た。

多摩川を水面から見る旅は今回河口から始まったが、次回からは奥多摩から下って再び河口に戻ってみたいと思う。何回になるか解らないが、水面から多摩川の様子をレポートしたい。

財団からのお知らせ

〈第一次研究助成選考結果〉

去る3月26日第26回定時選考委員会を開催し、平成元年度（第一次）研究課題の選考を行いました。今回選考された研究はA類研究6件、B類研究3件です。研究課題は次のとおりです。

| 研 究 課 題 | 代 表 研 究 者 | 所 属 |
|--|-----------|--------------|
| (A 類 研 究) | | |
| ● 奥多摩湖に発生する Microcystis 属ラン藻の、 アイソザイムを用いた同定および毒性の予知に関する研究 | 原 慶 明 | 筑波大学生物科学系助教授 |
| ● 多摩川下流域における化学的水質と視覚的水質汚濁に関する研究 | 落 合 正 宏 | 東京都立大学理学部助手 |
| ● 多摩川水系のトビケラ相とその分布 | 片 桐 一 正 | 東京大学農学部教授 |
| ● 多摩川およびその流域のクロロフェノールの分解菌相に関する生理生態学的研究 | 瀬 戸 昌 之 | 東京農工大学農学部助教授 |
| ● 多摩川・隅田川両水系の浮世絵による利用行為を軸とする比較研究 | 長 屋 静 子 | 水環境造形研究会研究員 |
| ● 住民のための多摩川環境情報の利用提供システムの研究 | 生 田 茂 | 東京都立大学教養部助教授 |
| (B 類 研 究) | | |
| ● 多摩川流域における魚食性鳥類の分布、及び映像分析による食性並びに摂餌習性の調査・研究 | 柚 木 修 | 映像プロデューサー |
| ● 日野台地の開発と水文環境の変化に関する研究 | 角 田 清 美 | 東京都立小平南高校教諭 |
| ● 言語表現からみた多摩川のイメージ構造解析に関する研究 | 小早川 智 明 | 環境都市研究会 |

多摩川'89の発刊について

多摩川'89の今年のテーマは「多摩川用水路物語」として、多摩川流域の用水路の現状と将来の姿について特集しました。2ヶ年の予定で編集を行なっていますが、今年は「その1」として概況と課題を取り挙げています。

〈総集編〉

多摩川流域の農業用水路の現状を紹介し、その中から、日野の用水、大丸用水、府中の用水を取り挙げ、将来どのように存続させていけば良いのかについて課題を整理しました。多摩川'90では、さ

らに一歩踏み込んで全国の事例を参考にしながら、水利権の問題、水路敷空間の問題、維持・管理体制の問題について検討したいと考えています。

〈資料編〉

総集編を踏まえ、「多摩川の用水関連資料」「日野の用水関連資料」「大丸用水関連資料」「府中の用水関連資料」に分け、種々の資料の中から関係部分を収録しました。

ご希望の方は財団事務局までお問い合わせ下さい。

シンポジウム開催のお知らせ

水辺の環境を考えるシンポジウムの開催についてお知らせします。

1. 「第2回生き物とまちづくりシンポジウム」

今回は日本有数のトンボ沼である静岡県磐田市で開催されます。

日時 ●平成元年6月4日(日) 9:30~17:00

場所 ●静岡県磐田市桶ヶ谷沼

※シンポジウムは、沼の近くの磐田グランドホテル

内容 ●午前9:30~ 桶ヶ谷沼ウッチング

写生大会とトンボ観察会(バッコウトンボ池)

●午後2:00~5:00

生きものとまちづくりシンポジウム。

14:00 受付開始

14:20 挨拶 高橋 健

(日本昆虫倶楽部幹事、作家)

秋山 一男

(静岡県県民生活局長)

14:35 特別講演 「トンボと私の自然観」

東 昭

(東京都立科学技術大学教授、

日本昆虫倶楽部会員、

東京大学名誉教授)

15:25 パネルディスカッション

「自然地の保全と創造と地域づくり」

コーディネーター

杉山 恵一

(静岡大学教育学部教授)

パネラー

幸丸 政明

(環境庁自然保護局企画)

調整課自然保護専門官)

新井 裕

(蜻蛉学会員、寄居に

トンボ公園を造る会)

今村 信大

(桶ヶ谷沼を考える会)

17:00 交流懇親会

残れる人だけで自由に交流する

会費 ●無料 (但し懇親会費 1,000円)

連絡先 ●磐田市青年会議所 ☎0538-37-1611

2. 「川」シンポジウム

~川のある暮らし、本物の川を求めて~

川はどうあるべきか。原点にかえり川のあるべき姿を改めて討論しようとするシンポジウムです。

日時 ●平成元年6月24日(土) 13:00~17:00

場所 ●全林野会館 5F 大ホール

東京都文京区大塚3-28-7 ☎03-945-6871

地下鉄丸の内線茗荷谷駅 歩7分

JR 大塚駅 歩15分

内容 ●問題提起 ①大井川地域 松下麟一

(日本茶業技術協会)

②多摩川地域 三田鶴吉

(立川市在住)

③長良川地域 木村英造

(淡水魚保護協会)

パネリング ①小林三衛(東京経済大)

②高橋 裕(東京大学)

③川那辺浩哉(京都大学)

④内山 節(哲学者)

司会 秋山紀子(実行委員)

〈訂正〉前号(41号)の「私と多摩川」本文中「熊野権限」「蔵王権限」「錦町下水道終末処理場権限」「若葉町清掃工場権限」はそれぞれ「……権現」に訂正します。

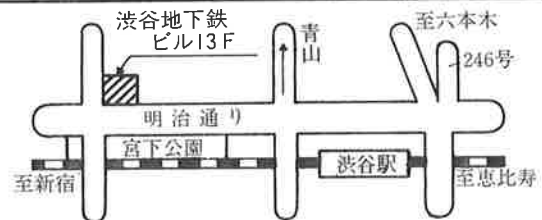
・発行日 平成元年6月1日

・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団

〒150 渋谷区渋谷1-16-14

(渋谷地下鉄ビル内)

TEL (03)400-9142



*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1

TEL (048)831-8125